

「剣道から授かったもの」

京都府

京都剣道教室

中学3年 井上 ころこ

私は去年の春、中三にして初めて運命の出会いを果たしました。それは剣道との出会いです。きっかけは三月、弟とともに京都剣道教室の門を叩いたことでした。以前から、剣道に対しては小説の影響で漠然と憧れを抱いていましたが、一步を踏み出せずにいました。しかしひとたび見学に行った途端、私はいっぺんに剣道に惚れ込んでしまったのです。

初めて私たちの道場である旧武徳殿に入ったとき、静謐で厳かな雰囲気、自然と背筋が伸びるのを感じました。更に、剣士の皆さんの気合の入った声と床板を踏み込む音の迫力に圧倒されました。先生方は初心者でもわかるくらい威厳と気魄に満ちておられ、畏怖の念とともに強い憧れを抱きました。そして、私もこの道場で、この先生方の下でこの剣士たちと学びたいと強く思いました。

私がこの剣道教室に入り、いざ剣道を始めて、改めて剣道に惚れ直した点が二つあります。一つ目は、剣道が感謝の気持ちを「礼」として態度で表す競技だということです。剣道では、お稽古を付けてくださる先生方や先輩、対戦相手に「お願いします」と頭を下げ、終わると「有難うございました」と感謝を示し、礼をします。感謝するのは指導者や対戦相手にだけではありません。道場に入るときには「道場を使わせていただきます」という感謝の気持ちで礼をしますし、お稽古の準備をし、陰で支えてくださっている保護者の方々にも、心を込めて挨拶をします。「礼に始まり、礼に終わる」という剣道の作法を学ぶことで、自然と謙虚な気持ちでお稽古に向かえる自分に気付きました。更に、最近になって思い至ったことがあります。それは、自分はこれまで、先生方に感謝するのと同じように、両親にも感謝の気持ちを持って接していただろうかということです。正直なところ、私は両親が自分のためにしてくれることを、どこか当たり前のよう感じ、それが時に横柄な態度となって表れていた気がします。しかし、剣道から教わった謙虚な心で自分を見つめ直したとき、両親には勿論、私を支えてくれる全ての人に対して、常に感謝をしなくてはならないのだと気付かされました。

二つ目は、剣道のお稽古は、相手から学ぶと同時に相手へ継承するものだということです。普段私達のお稽古では、上級者すなわち道場での先輩方が元立ちとなって習技者に打たせてくれ、アドバイスをくれます。まだまだ初心者で失敗ばかりの私にも、嫌な顔一つせず向き合ってくれる先輩方に、初めはご自身の練習時間を奪っている気がして申し訳なく思っていました。しかし、先輩方のお稽古の様子を見ていて考えを改めました。先輩方は、ご自身が習技者として先生やOBの方々とお稽古をするとき、まさに「相手の胸を借りる」といった様相で、見ているこちらが息を飲むほど真剣に打ち合いをされます。その

ようにして先輩方も相手から技を学び取り、そしてそれをまた、私たちに伝えようとしてくれているのだと悟りました。そもそも「稽古」という言葉は、「師を通じて先人が培ってきたものを学ぶ」という意味だそうです。そのようにして剣道の技と精神は脈々と継承されてきたのでしょう。私も、伝統を受け継ぐ者の一人として、これまで以上に真剣にお稽古に取り組みたいと思います。

私が剣道を始めたのは、人より少し遅かったかもしれませんが。しかし、「今」だったからこそ私の心に深く刺さったのだとも思います。剣道は、これまで自分中心に世界が回っていた私の人生観を変えました。私は多くの人に支えられ、与えられて生きています。そのことへの感謝を常に忘れないだけでなく、私自身も誰かを支え、与えられる人になりたい。受け継がれてきた剣士としての精神を身に付け、皆が支え合って生きる社会の一員として、人の役に立ちたい、そう思うようになったのです。そのために私は、ますます全身全霊で剣道のお稽古に精進したいと思います。